

3年 国語科学習指導案

授業者 大阪市立中津小学校 石川 朱梨

- 1 日 時 令和7年11月11日(火) 第6校時(14:00~14:30)
- 2 学年・組 第3学年3組(在籍26名)
- 3 単元名 登場人物の性格について想ぞうしたことをつたえ合おう
(斎藤隆介「モチモチの木」東京書籍3年下)

4 単元目標

- (1) 登場人物の性格を表す言葉の意味や使い方を理解することができる。
[知識及び技能](1)オ
- (2) 登場人物の性格を考えるために、文章中の手がかりとなる言葉を見付けることができる。
[思考力、判断力、表現力等] C(1)イ
- (3) 登場人物の性格について、物語の展開や会話、行動などを関連付けて想像することができる。
[思考力、判断力、表現力等] C(1)エ
- (4) 言葉がもつよさに気付くとともに、幅広く読書をし、国語を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。
「学びに向かう力、人間性等」

5 単元間の関連と系統

前単元(2年12月)

本単元(3年11月)

次単元(4年9月)

| | | |
|---|---|--|
| <p>学習材</p> <p>「かさこじぞう」</p> <p>昔話の言葉やお話の流れに着目しながら読み、おもしろさやよさに気付き、感じたことを伝え合う。</p> | <p>学習材</p> <p>「モチモチの木」</p> <p>登場人物の性格を物語の展開や会話、行動に着目しながら捉え、想像したことを伝え合う。</p> | <p>学習材</p> <p>「一つの花」</p> <p>物語の中の大事な言葉に着目しながら読み、題名のもつ意味について考えたことを伝え合う。</p> |
|---|---|--|

6 単元で取り上げる言語活動

本単元においては、「人物紹介カード」の作成を中心とした言語活動を設定することとした。この活動は、登場人物の行動の背景やその理由について、文章中の叙述を根拠として読み取り、人物の性格を具体的に紹介することを目的としている。活動を進めるにあたっては、語り手の視点や地の文に着目して読み取ること、また登場人物の行動や会話を手がかりにして性格を想像することが求められる。これらの読みの過程を通して、学習者が登場人物の性格を多面的に捉え、根拠をもって言語化する力を育むことができると考える。したがって、本単元の目標にふさわしい言語活動であると考えた。

(関連:[思考力・判断力・表現力] C(1)エ)

7 評価規準

| 知識・技能 | 思考・判断・表現 | 主体的に学習に取り組む態度 |
|-------------------------------------|--|---|
| ○ 登場人物の性格を表す言葉の意味や使い方を理解している。((1)オ) | ① 登場人物の性格を考えるために、文章中の手がかりとなる言葉を見付けている。 (C(1)イ) ② 登場人物の性格について、物語の展開や会話、行動などを関連付けて想像している。 (C(1)エ) | ○ 場面の变化や行動、会話を手がかりに登場人物の性格について自分なりに想像し、学習の見通しをもって、登場人物の性格を紹介しようとしている。 |

8 指導にあたって

【学習者観】

本学級の学習者は、4月に「すいせんのラッパ」、6月に「ワニのおじいさんのたから物」9月に「サーカスのライオン」の学習を行った。

「すいせんのラッパ」の学習では、「様子をそうぞうして音読しよう」という単元のめあてを設定し、学習に取り組んだ。学習者は、「時・場所・人物」に注目して場面を整理し、三匹の「かえる」の登場順やそれぞれの特徴、すいせんのラッパの音の違いに着目することで、物語の大体の流れや構成をつかんだ。読み取りでは、「すいせん」「かえる」「あり」の気持ちや様子について、叙述を基にして想像した後、それぞれの場面の様子を思い浮かべながら、音読に取り組んだ。登場人物の気持ちを考えてから音読したことで、場面の様子がよりはっきりと見えてきて、学習者が自信をもって読む姿が見られた。また、言葉の響きや描写に注目し、声の大きさや強弱、読む速度などを工夫する姿から、作品の世界に親しみながら読み進めようとする学習者も見られた。さらに、お気に入りの場面を選び、音読を聞き合う活動では、他の学習者の表現の工夫に気付く姿が見られた。学習者は、互いの読み方を認め合いながら、よりよい音読の仕方をみんなで考え、工夫しようとする様子が伺えた。その姿からは、表現する力が少しずつ育まれ、友だちと一緒に学び合う楽しさが感じられた。

また、「ワニのおじいさんのたから物」の学習では、「物語をみじかくまとめてしょうかいしよう」という単元のめあてを設定し、学習に取り組んだ。まず、物語を読み進めながら、場面ごとにどのような出来事があったのかを確かめた。そして、「いつ」「どこで」「だれが」「何をしたか」を書いたり、短い言葉に言い換えたりしながら、あらすじをまとめた。「おにの子」や「ワニのおじいさん」の性格については、直接的な描写がないため、行動や会話に関わる叙述を基に人物の様子を想像した。学習者は、どの言葉が手がかりになるのか難しくしていたが、少しずつ登場人物の気持ちに目を向けながら、場面の様子を想像しようとする姿が見られた。学習の後半では、「ワニのおじいさんのたから物」の紹介カードの作成に取り組んだ。学習者は、あらすじをまとめ、ワークシートに書き表した。最後には、友だちとカードを読み合い、よかったところや感想を伝え合うことで、互いの考えに触れることができた。

さらに「サーカスのライオン」の学習で、中心人物について考えたことをカードにまとめた際には、中心人物の行動や様子、会話などに着目して読み進めることで、気持ちの変化やどのような人物なのかを想像して書くことができた。学習の振り返りを書く際には、誰のどんな意見が自分の考えと似ていたり違っていたりしていたか、次の学習で何について学びたいかなどについて考える時間を毎時間設定したことで、自分の考えや思いを具体的に書くようになった。

このような学習を通して、学習者は登場人物の気持ちについて、文章中の言葉を手がかりにしながら想像する力を育てている。叙述を基にして気持ちを考えながら読み進めることで、物語の世界に親しみをもち始めている様子が見られる。また、グループ活動やカードの読み合いを通して、友だちの考えや表現に触れ、新たな見方に気付く学習者もあり、互いの読みを深め合うことができつつある。

【単元観】

本単元では、豆太の性格や気持ちについて、叙述にある地の文や会話文などに着目しながら捉える。場面ごとに読み進めながら、豆太の性格を「おくびょう」ともう一つ選んで設定し、「豆太紹介カード」に表しながら、その理由となる考えをまとめる。

本学習材「モチモチの木」は、地の文を語り手が語りながら、5つになった中心人物「豆太」が、夜は一人でトイレに行けない臆病な性格であるものの、一緒に暮らす唯一の家族である「じさま」の思いを聞いたり、じさまの腹痛の際には、山道を2キロメートル下ったところにいる医者様を呼びに行ったりする中で、臆病だけれどもいざという時には勇気が出せるという、豆太なりの成長を感じられる文学的作品である。学習者にとって、語り手によって物語が進められていく本学習材には、初めての読み心地があると言える。

題名である「モチモチの木」は、豆太の「臆病」を表す上で重要な役割を果たす。一人でしょんべんに行けない理由として「夜になると…木がおこって、両手で、『お化けええ！』って、上からおどかすんだ。」と語られているが、豆太の成長を象徴する「山の神様の祭り」も、モチモチの木に灯がともることによってもたらさ

れる。また、物語は5つの場面から構成され、それぞれに小見出しがついている。

「おくびょう豆太」では、冒頭から、語り手によって「全く、豆太ほどおくびょうなやつはいない。」と語られている。豆太の性格を捉える上で、臆病ともう1つの性格を考える必要があるが、臆病な気持ちをただの弱さとして一面的に見るのではなく、その程度や場面ごとの変化を的確に捉えることも必要である。じさまと2人で暮らしている獵師小屋の外にある、電灯のない雪隠（便所）へ1人で行くのは、大人でも恐怖を感じる。状況を捉えれば、数え年で5歳である豆太が1人で雪隠に行けなくとも仕方がない、と読むこともできる。

「やい木い」では、豆太の二面性が描かれている。昼間は、モチモチの木に対して足踏みして威張るやんちゃな性格が見られるが、夜になると臆病で怖がりな性格が見られる。モチモチの木に対する豆太の様子から、状況に応じて変わる性格から、人物の性格は1つではなく、多様な性格が備わっていることに気付くことができるだろう。

「霜月二十日のぼん」では、前半で豆太に対するじさまの想いが語られており、後半では、それを受けた豆太が葛藤する。「じさまも、おとうも見たんなら」と見たい気持ちを高めるも、夜に1人は無理だと考え、「昼間、だったら、見てえなあ……」と考えるものの、はじめっから諦めて寝てしまう。豆太の臆病さや弱さと同時に、勇気がなかなか出ない部分も表れている場面である。

「豆太は見た」では、大きく2つの場面に分けられる。前半は、じさまが腹痛で唸り、医者様を呼ぶために、豆太が2キロメートルもある夜道を裸足で駆ける。1人で夜に出歩くのは怖い、じさまが死んでしまう方がもっと怖いと考え、勇気を振り絞って走る場面であり、学習者たちはこれまでの豆太とのギャップから、その凄さに圧倒されるだろう。臆病ではあるが、優しさや自分が助けなければならないという使命感、自信、勇気のある豆太を、かっこいいと評価する学習者が多いだろう。後半では、医者様におんぶしてもらって小屋へ戻る安心感からか、急かすためにどんどん蹴飛ばす様子が描かれている。じさまのために必死になる優しさがあるが、わがままな性格であるとも捉えられる。そんな豆太が、灯がともったモチモチの木を目にする。しかし、じさまの看病ですぐに小屋へ入り、医者様の手伝いをしている。驕る気持ちより、じさまのために行動する様子から、じさまに対する優しさを感じられるだろう。

「弱虫でもやさしけりゃ」は、医者様を呼びに行った豆太に対して、じさまが価値付ける言葉かけをしている場面である。挿絵からも、豆太の成長に対して、じさまが一定の評価をしているように感じられる。豆太に語る中で、「自分で自分を弱虫だなんて思うな」と言っており、「それを見て他人がびっくらするわけよ」と、どう見られているかは他人が決めることだと伝えている。読者へのメッセージとも捉えられる。また、最後の三行で、しょんべんにじさまを起こす豆太が描かれており、「結局豆太は、物語を通して変容していないのではないか」と捉える学習者も現れるだろう。学習材全体の出来事から豆太がどんな成長をしたのか振り返ることで、豆太の性格を「臆病だけど、○○な豆太」と複数の性格で捉えられるようにする必要があるだろう。

単元全体の最後には、学習材を読んで作成した「豆太紹介カード」を参考にしながら、自分が読み進めてきた人物を紹介する「人物紹介カード」を作成する。「豆太紹介カード」と同様に、性格の二面性が分かるように人物を捉え、その理由とともにカードに表現できるようにする。これらの学習が、次単元の「物語のしかけのおもしろさをつたえ合おう」などの学習の際に生かされる。

【指導観】

第一次の初発の感想を書く際には、四つの観点「一番心に残ったこと」「不思議だと思ったこと」「みんなで考えたいこと」「お話を色で表そう」を黒板に提示することで、読む視点をもてるようにする。感想の交流では、ペアやグループで感想を共有し、他者の視点に触れることで、多様な視点から物語を捉えられるようにしたい。そして、クラス全体で読みの視点を共有した後、意味が曖昧な言葉や語彙を辞書で調べたり、写真を提示したりすることで、語彙の理解を深めるとともに、文章中の言葉に対する関心を高められるようにする。最後に、教師作成の既習学習材における成果物を提示することで、学習者が本単元における学習のねらいや活動の流れを具体的に捉えられるようにする。これにより、学習者が単元全体の学習の見通しをもち、目的意識をもって主体的に学習に取り組めるようにしたい。

第二次では、語り手の視点や会話文、挿絵や場面の比較などに着目しながら豆太の性格を想像し、「豆太紹介

カード」に整理し、性格の言語化を図る。

豆太の性格を捉えるために、物語の展開や登場人物の行動・会話・語り手の視点などに着目しながら読み進める活動を複数回設定する。まず、「おくびょう豆太」「やい木い」の場面では、語り手の言葉や豆太、じさまの行動・会話文などに着目しながら、昼間の豆太の様子を読み取るようにする。学習者が豆太の性格を捉える際には、文章中の叙述を根拠として「おくびょう」であることを示す言葉を見つけ出し、それを基にして「今日の豆太カード」にまとめるようにする。この際、昼の豆太の性格を想像することが難しい学習者もいることが予想されるため、教科書の「言葉の広場」にある性格を表す語彙を提示し、参照するよう促しておく。これにより、学習者が自分の読み取った豆太の性格を適切な言葉で表現できるようにしたい。

次に、「霜月二十日のばん」の場面では、じさまの語りかけの言葉や、豆太の会話文や様子に着目させることで、豆太の性格を読み取ることができるようになる。この場面では、豆太がじさまの話を聞いて興味をもつものの、自分にはできないと感じてすぐにあきらめてしまう姿が描かれている。学習者には、豆太の「やってみたい気持ち」と「こわい気持ち」が入り混じっていることを叙述で確認し、豆太の心の中で起こっている葛藤に気付くことができるようにする。

「豆太は見た」では、夜の外に出た場面の叙述に注目させることで、学習者が豆太の気持ちや、何に対して怖がっているのかを具体的に考えられるようにする。例えば、「しもが足にかみついた。」「いたくて、寒くて、こわかったからなあ。」「でも、大すきなじさまの死にしまうほうが、もっとこわかったから。」といった文章を手がかりに、豆太の恐怖の対象を読み取れるようにする。こうした読みを通して、学習者が「なぜ、豆太はモチモチの木に灯がついているのを見ることができたのか。」という問いに対して、自分なりの考えをもてるようにする。「豆太は〇〇だから、灯を見ることができた。」という構文を活用することで、学習者が自分の考えを整理しやすくするようにする。さらに、グループでの話し合いやペア活動を取り入れることで、他者の考えに触れながら自分の読みを広げ、深める機会を設けたい。

「弱虫でもやさしけりゃ」の場面では、じさまの語りかけの言葉に着目させることで、豆太が気づいていない成長に気付かせたい。豆太はじさまの言葉を聞くことで、臆病だけれども、少しずつ自信をもち始めていることが読み取れる。また、最後の「じさまあ。」と、しょんべんにじさまを起こす場面についても、単に臆病に戻ったわけではないことにも気付かせたい。そこで、「豆太紹介カード」を使い、「おくびょうだけれど、〇〇。」「なぜなら、△△。」という形式で、豆太の性格を多面的に捉えられるようにする。叙述に基づいて、自分の考えを表現する力を育てたい。さらに、タブレットを使ってカードを作成することで、他の学習者の考えを参照したり、指導者が素早く形成的評価を行ったりできるようにする。また、「おくびょうだけれど、〇〇」の部分を書けたら交流を始めるようにし、その理由を伝え合うことで、後半部の理由をより広く深く考えて書けるようにしたい。最後の全体交流では、友だちの考えから豆太の人物像をさらに理解できるようにしたい。

第三次では、斎藤隆介さんの他の作品を読み、学習者が自ら選んだ登場人物について「人物紹介カード」を作成する活動を行う。これにより、物語の中での人物の様子や言動、気持ちに目を向けながら、自分なりの視点で性格を想像し、表現する力を育てたい。また、ワークシートの形式をいくつか用意し、自分に合った方法を選べるようにすることで、「このやり方ならやってみたい」「自分らしく書けそう」と思えるようにし、学習に進んで取り組めるようにする。作成したカードの交流では、友だちの作品に触れることで、自分とは異なる視点や解釈に気付き、人物の見方にいろいろな考え方があることを実感できるようにする。また、交流の際には、友だちのカードのよさを見つけて伝え合うように声かけすることで、互いの考えを大切にしながら学び合う姿勢を育てたい。さらに、自分のカードに対する友だちからの感想や質問を受けることで、「もっとこうしたらよかったな。」「この考えは伝わったかな。」と振り返ることができ、自分の学び方を見直すきっかけになるようにする。単元のまとめでは、「人物の性格を想像するために、どのように読んできたか。」を問いかけることで、学習者が自らの学びを振り返り、自覚できるようにする。そして、そこで得た読み方や気付きが、今後の読書生活にも活かされるようにしたい。

このような活動を通して、友だちと話し合ったり、考えを聞いたりする中で、「そんな見方もあるんだ。」「自分の考えも伝えてみよう。」と思えるようにしながら、物語の人物についての考えを広げたり、深めたりしていけるようにしたい。

9 指導と評価の計画（全10時間）

| 次 | 時 | 学習活動 | 指導上の留意点 | 評価規準・評価方法等 |
|---|---|--|--|---|
| 一 | 1 | ○全文の範読を聞き、初発の感想を書く。 | ・範読前に「一番心に残ったこと」「不思議だと思ったこと」「みんなで考えたいこと」「お話を色で表そう」などの観点を提示し、学習者が何に着目して読めばよいかを明確にする。 | [主体的に学習に取り組む態度] <u>観察・発言</u> ・人物紹介カードを作るという言語活動を知り、単元全体での学習の見通しをもつことができているかの確認。 |
| | 2 | ○感想を交流し、学習計画を立てる。 ○『人物紹介カード』を作ろうという単元の見通しをもつ。 | ・前時に出した四つの観点を基にして交流することで、自分なりの読みの視点を言葉にできるようにする。 ・交流で出てきた言葉について、辞書や一人一台学習者用端末（タブレット）を使って意味を調べることで、登場人物の性格を表す言葉や語彙の理解を深められるようにする。 ・作成する「人物紹介カード」と前単元で作成した「じんざ紹介カード」を提示し、性格に着目したカードを作成するという単元のゴールを見通せるようにする。 | |
| 二 | 3 | ○「おくびょう豆太」「やい木い」について読み、豆太の性格を想像する。 ○豆太の性格を「豆太紹介カード」にまとめる。 | ・地の文（語り手）や会話文から、豆太の性格につながる言葉を見付けられるようにする。 ・昼と夜の豆太の様子を比較できるような板書にすることで、性格の違いを捉えることができるようにする。 ・教科書P.153「言葉の広場」の「人物のせいかくを表す言葉」を示し、学習者が捉えた性格を言語化できるようにする。 | [知識・技能] <u>観察・カード</u> ・豆太の性格を表す言葉の意味や使い方を理解することができているかの確認。 (1)オ |
| | 4 | ○「霜月二十日のぼん」を読み、豆太の性格を想像する。 ○豆太の性格を「豆太紹介カード」にまとめる。 | ・豆太自身の思いが分かる叙述に着目させることで、豆太の性格を想像できるようにする。 ・前時に捉えた豆太の性格に、読み取った内容を加えることで、豆太の性格をより理解できるようにする。 | [思考・判断・表現①] <u>教科書・ノート・発言・カード</u> ・豆太の性格を考えるために、文章中の手がかりとなる言葉を見付けることができているかの確認。 |
| | 5 | ○「豆太は見た」を読み、豆太の行動の理由を考える。 | ・じさまが倒れたときの豆太の様子や行動などに着目して読むことで、豆太の思いを想像できるようにする。 ・外に出たときの叙述に着目し、その内容を手がかりに豆太の気持ちを考えられるようにする。 | [思考・判断・表現②] <u>発言・カード</u> ・豆太の性格について、物語の展開や会話、行動などを関連付けて想像し、カードに表現することができているかの確認。 |

| | | | | |
|---|--|--|---|--|
| 三 | 6 | ○豆太が山の神様のお祭りを見ることができた理由を考える。 ○豆太の性格を「豆太紹介カード」にまとめる。 | ・山の神様のお祭りを見ることができ る条件を確認することで、豆太がな ぜ見られたのか、理由を考えられる ようにする。 ・豆太の行動や気持ちから性格を捉え させ、性格としてまとめて | [主体的に学習に取り組 む態度] <u>振り返りシート</u> ・友だちと話し合うこと のよさや本時の学びを 自覚したり、自らの問 いを解決しようと自己 調整したりしたことにつ いて振り返ろうとして いるかの確認。 |
| | 7 | ○お話を通して、豆太はどん な子だったのかを考え、「豆 太紹介カード」にまとめる。 | ・第一場面と第五場面の挿絵の比較や 結局雪隠に行けていないことから、 物語全体を通した豆太の成長につ いて、叙述に基づいて捉えさせる。 ・「豆太は、おくびょうだけれど、○○。」 「なぜなら」と話型を示すことで、学 習者が叙述を基にして「豆太紹介カ ード」をまとめられるようにする。 | |
| | 8 | ○斎藤隆介さんの作品を読ん で、登場人物の性格を想像 する。 | ・同じ本を選んだ友だちと感想や気付 きを共有することで、多様な視点に 触れられるようにする。 | [思考・判断・表現②] <u>発言・人物紹介カード</u> ・自分が紹介したい登場 人物の性格について、 物語の展開や会話、行 動などを関連付けて想 像し、表現することが できているかの確認。 |
| | 9 | ○「人物紹介カード」を作成す る。 | ・ワークシートの形式を複数用意し、自 分に合った方法を選択できるように することで、主体的に学習に取り組 めるようにする。 | |
| | 10 | ○「人物紹介カード」を交流 し、感想を伝え合う。 ○単元の振り返りをする。 | ・友だちのカードのよさを見つけるよ う声をかけることで、人物の見方の ちがいや共通点に目を向けながら読 むことができるようにする。 ・「人物の性格を想像するために、どの ように読んできたか。」を問いかける ことで、学習者が自らの学びを振り 返し、自覚できるようにする。 | [主体的に学習に取り組 む態度] <u>ノート</u> ・単元全体で身に付いた 力を自覚したり、今後 の国語科の学習や日常 生活に活かそうとした りしているかの確認。 |
| | <p>[知識・技能] 観察・カード</p> <p>「おおむね満足できる」状況（B）評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・豆太の性格を表す言葉の意味や使い方を理解することができている。 <p>「努力を要する」状況（C）への手立て</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「豆太がどんな行動をしたからその性格と言えるのか」を問い、一緒に本文を読み返したり、性格を表す言葉の意味を簡単な言葉に言い換えたりする（「思いやりがある」→「やさしい」）ことで、言葉の意味や使い方を理解できるようにする。 <p>[思考・判断・表現①] 教科書・ノート・発言・カード</p> <p>「おおむね満足できる」状況（B）評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・豆太の性格を考えるために、本文の語り手の言葉や豆太の行動や様子が書かれている部分を見付けることができる。 | | | |

「努力を要する」状況（C）への手立て

- ・「豆太」と書かれているところに着目して読むように促したり、行動や会話の部分に線を引いたりすることで、文章中から手がかりとなる言葉を見付けることができるようにする。

〔思考・判断・表現②〕発言・カード

「おおむね満足できる」状況（B）評価

- ・豆太の性格について、物語の展開や会話、行動などを関連付けて想像し、「豆太カード」や「人物紹介カード」に表現することができている。

「努力を要する」状況（C）への手立て

- ・「〇〇な性格」や「なぜなら、」という話型を用意することで、学習者が文章中から引用した語や文に続けて、自分なりに豆太の性格を捉え、人物紹介カードに表現することができるようにする。

〔主体的に学習に取り組む態度〕ノート

「おおむね満足できる」状況（B）評価

- ・振り返りシートを手がかりに単元全体で身に付いた力を自覚したり、これからの国語科の学習や日常生活に活かそうとしたりしている。

「努力を要する」状況（C）への手立て

- ・既習事項を振り返ったり、成果物を見返す時間を設けたりすることで、自分の成長を実感できるようにする。
- ・振り返りシートにコメントを添えたり、友だちと振り返りを共有する場を設けたりすることで、学習者が自身の学びを自覚できるようにする。

9 本時の学習

（1）本時の目標（7／10）

物語全体を通して、豆太がどんな性格かを叙述に基づいて想像することができる。

（2）本時の展開

| 学習活動 | 指導上の留意点 | 評価 |
|---|---|--|
| 1 前時までの学習を振り返り、本時の学習課題をつかむ。 | ・これまでのノートや制作してきた「人物紹介カード」を参照することで、本時の学習の見通しをもつことができるようにする。 | |
| お話を通して、豆太はどんな子だったのか考えよう。 | | |
| 2 第一場面と第五場面の挿絵を比較しながら、「弱虫でもやさしけりゃ」を手掛かりに、豆太の性格につながる言葉を見付ける。 | ・二枚の挿絵の構図が変わっていないことや、最後の「結局一人で雪隠に行けない」ことに着目させ、豆太は成長していないのではないかと問うことで、第五場面の叙述から、じさま視点での豆太の成長を探せるようにする。 ・豆太の性格につながる言葉を色チョークで書くことで、「豆太紹介カード」を作成するときの支援になるようにする。 | ◆〔思考・判断・表現②〕 <u>発言・ノート</u> ・登場人物の気持ちや性格について、物語の展開や会話、行動などを関連付けて想像することができるかの確認。 |
| 3 物語を通して、豆太はどんな子だったのかを「豆太紹介カード」にまとめる。 | ・「豆太は、おくびょうだけれど、〇〇な子。」 「なぜなら」という話型を示し、学習者が読み手として読み取った豆太の性格を「豆太紹介カード」にまとめられるようにする。 ・話型通りでなくともよいこととする。 | |

| | | |
|---|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 自由交流 ・ 全体交流 <p>4 本時の学習を振り返る。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ 性格を表す前半部の入力が終わった人から対話する相手を見つけて自由に交流させることで、理由にあたる後半部の考えが広がりたり深まったりするようにする。 ・ 後半部の入力を行った後に全体で交流し、多様な考えに触れられるようにする。 ・ 振り返りの観点を示し、それに沿って書くことで、自分の学びを整理することができるようにする。 | |
|---|--|--|

10 板書計画

モチモチの木
斎藤 隆介 文

めあて
お話を通して、豆太はどんな子だったのかを考えよう。

一場面の挿絵

夜中に一人でせっちんに行けない。
モチモチの木がこわい。
あくびよう 弱虫
なさけない
たよらない

〈弱虫でもやさしけりや〉

成長していない？

五場面の挿絵

豆太

そのばんから、「じさまあ。」
と、しょんべんにじさまを起こしたとき。

あまえている やさしい 勇敢い

成長している！

一人て医者様をよびに行けるほど、勇気のある子だ
やさしささえあればいい
やる時にはやる
たよになる

がまん強い 勇気がある

ふり返し

- ・ 豆太はどんな子だったのか、自分の考えを書くことができた。
- ・ おくびようだった豆太が、ゆう気があって、成長したことがわかった。

・ おくびようだけだとよになる ↓ いざという時にすごいから
・ おくびようだけだとやさしい ↓ やさしいから、だれかのために
かんばることができから

・ たよになるけどあまえんぼう ↓ いざという時はたよになるけど、いつもはあまえているから